

研究者によって次第に解かれつつある。それには学問環境の変化も少なくない。我々の分野について言えば、出土文字資料の増加、漢籍の一字検索ができるデータベースの普及、中国や韓国の研究機関との共同のフィールド調査、研究成果をリアルタイムに発表できるサイト（武漢大学の簡帛網など）等々で、総じて言えば、コンピュータ環境の発達と海外との共同研究の進展というべきか。この両者はもはや後戻りのできない学問推進の牽引車となっているのである。

〈第一回〉

私と歴史学の不確かな関係

藤野 裕子

「わたしと歴史学」というお題目には若干とまどうものがあります。現在私と歴史学との関係は非常に揺らいでいて、確たるものとして説明できないからです。でもも

しかしたら、この不確かな関係を不確かなままお話しすれば、専攻を決めようとしているみなさんに何がしかのヒントになるかもしれない。このようにも思います。

前提としてですが、大学での歴史学の学び方は高校の歴史の勉強とは大きく異なります。大学での歴史学には、教科書のような「答え」がありません。それどころか「問い」もありません。自分で問いを立て、調べ、答えを考えなければなりません。さらにそれを誰かに伝える。そこまでやって初めて学問になります。つまり学問としての歴史学には、①問いを立て、考える主体である「自分」、②調べる「対象」、③考えを伝える「相手」、の三つが新たに加わってきます。私と歴史学の関係が不確かに揺らぐ原因もここにあります。殊に①③は、決して固定的ではないからです。

私が①②③を明確に意識するようになったのは修士論文を書いている最中でした。論文のテーマは、一九〇五年に東京で起こった日比谷焼打事件という大規模な暴動でし

た。その暴動がどのようにして起きたのか、知りたくてたまりませんでした。

そこで私はこの事件の裁判記録を読み、起訴された暴動参加者の一人一人の行動をたどってみました。その結果浮かびあがった事実は、次のようなことです。暴動の夜、日比谷公園周辺から交番の焼打が始まり、徐々に東京市全体に広がります。しかし最初から最後まで暴動に参加した人は多くありません。ほとんどは仕事帰りなどにたまたま暴動に出くわし、面白半分に見物するうちに自らも焼打に加担しはじめた人たちでした。これには驚きました。もし私が街で交番に火を付けている集団を見かけたら、怖くてその場を離れます。決してそこに加わらないでしょう。一〇〇年前の暴動参加者と今の私とは、暴力と秩序の感覚が根本的に違う。このことに気づいたとき、自分の中で①②③の関係が明確になりました。

その頃の私は、この秩序だった社会に言いようのない息苦しさを感じていました。見えない力によって自分のふるまいや身体

が制限され、鬱屈する感じです。だからこそ秩序と対局にある暴動に惹かれたのかもかもしれません。暴動が起こりえた一〇〇年前の社会から現在の秩序正しい社会へどのように変化したのか。この点を研究することで、自分の抱える鬱屈の来歴を明らかにしたい。そのことで、同じように鬱屈する人に何かを届けられるかもしれない。そう考えるようになりました。

つまり私は自らの抱える問題を歴史に託して表現しようとしたのです。これができるのが歴史学の力の一つだと思います。もしみなさんの中で、言葉にできない問題や息苦しさを抱えている人がいたら、一度歴史と正面から向き合い、歴史を通してそれを表現してみるとよいかもしれません。これがみなさんに伝えたいことの一点目です。

さて、修士論文から八年ほどが経ちました。八年経てば自分自身も変わり、社会も変わります。かつて築いた①②③の関係もそのままではいられません。この間、私にとって大きかったのは、アメリカに二年間

留学したことです。向こうもまた大変に鬱屈した社会ではあるのですが、ともかくも日本を二年間離れたことで、自らを縛っていたものが一旦解除された感じがしました。そして帰国してみたら、以前感じていた抑圧や鬱屈の原因は、確かにそこに存在するのだけれども、自分にとってそれほど意味を持たなくなっていました。それだけ客観視できるようになったのでしょうか。この①「自分」の変化によって、私と歴史学の関係は今急激に揺らいでいます。

アメリカでは研究者の学問との関わり方は日本よりも多様です。論文とは全く違うテーマで小説を書いている人もいれば、研究と同じテーマで題材を変えて映画を作っている人もいます。そうした姿を見るにつけ、私もまた、表現する手段や内容を固定化せずに、時々に応じて大事だと思うことを、あらゆる方法で社会に投げかけていきたい、そう思うようになりました。もちろん歴史学も方法の一つでしょう。でもそれだけではない。私と歴史学との関係は、絶

対的なものではなくなりつつあります。

そんな私ですから、みなさんに歴史学だけをおすすめすることはできません。むしろ今の時点で史学科への進級を固く決めている人がいたら、全速力で止めたいと思います。生きていけば価値観や世界観は変わり、社会も変わります。大学生活が始まってまだ二ヶ月です。答えを一つに決めず、さまざまな学問に触れ、社会の成り行きもじっとならんで、不確かに変わりゆく自分を今しばらく楽しんでほしいと思います。専攻を決めるのはそれから遅くありません。これが伝えたいことの二点目です。

中央アジア史研究への道

野田 仁

連続講演会のお話した内容について、その要点を以下簡単にまとめておきたいと思います。それは、おもに二つの部分に分けることができます。